

サローヤンの描く子供の世界

高 島 敦 子

一

ウィリアム・サローヤンは話術を得意とする作家だと云われる。彼の短篇小説には綿密なプロットや構成がなく、親しい人に話したり手紙を書いたりするように、思いつくままに語られているものが多い。

このようなサローヤンの作風に対する評価は、当然のことながら極端な賛否両論に分かれる。彼は「瞬間の気分をほとんど絶対的なもの」と信じて、それ以外のものを一切それに従属させようとするため、彼の作品は十分に発展するまとまった物語ではなくて、個々の事件の連続になってしまう⁽¹⁾、と云う批判がある。それに対して、ことばの飛躍や詩的表現は心理や感情の深い層を表現したいときに用いられる当然の方法である⁽²⁾、と云う弁護もある。サローヤンの作品にはほとんど心理描写がみられず、たまにあるにしてもそれは地の文よりも会話の部分に多く表われる。しかし、右のような批判をする人々にはそれが物足りないのだろう。それを弁護する人々は、少くともサローヤンのある部分を理解することができると信じている。

次に、彼の作品には軽快なリズムとムードはあるが「それを支える知性」が不足している⁽³⁾、と云う批判もある。又、彼は技巧ということに意を払わず、「強靱な知性と鋭敏な感覚」で現実を濃縮して再現することをしない、と云う批判もある。サローヤンは自分の思うこと(思想)を噛みくだいて煮つめて、これでもかこれでもかと読む人の心に訴えかける方法(形式)を知らない、と云うのである。

これについてはサローヤン自身がこう答えている――

「……なぜ作家として私はおもしろい振舞い方を、いさぎよしとしなかったのだろうか？……自分がおもしろい感じ方をしなかったから、おもしろい振舞い方を拒絶したのである。私はおもしろい感じ方をするとか、しかもめららしい感じ方をするのが当然だ、と云うふうには思っていないかった。……おもしろいと云うことと、偉大な作品とのあいだに、何ら神秘的な関連はないのである……」⁽⁵⁾

彼は一般に短篇小説家として認められている。短篇小説は「学問的図式」には当てはまらなくてもよいのだ。(短篇小説を文学と置き換えても同じだと思う) 極端にいえば、短篇小説の第一条件は面白いことである。⁽⁶⁾ サローヤンはひらきなあって人生問題を論じたり、社会問題にとりくんだりする人ではない。彼の作品の中で、人種問題とか貧民階級のような社会問題が取り上げられているとしても、それは彼独自のユーモアで暖かく処理されている。彼はなぜユーモアを大事にするか？ それは、この世の中で迷惑がられているものを少しでも歓迎させるようにするには、それにユーモアを加味しなければならないからであり、又、ユーモアがあれば希望は生まれ、人間というものには希望なしでは生きられないからである。

サローヤンはまことの作家でありまことの詩人である。彼に、偉大な哲学者の名言や、牧師の有益なお説教や、政治家の熱弁や、社会問題研究家の議論と統計表を求めるのは筋違いであるし、彼に対する侮辱でさえあると思う。それでは、一部の批評家が云うように、サローヤンの作品は読む人の心に何の問題意識も起こさないだろうか？⁽⁷⁾ 「ああ面白かった」で忘れられてしまうものだろうか？ サローヤンをほんとうに（このほんとうにはなくてもよいのだが）理解する者にとっては決してそうではないはずだ。サローヤンを理解する者を、サローヤンと同じように見、聞き、感じ、呼吸する者、と云い換えてもよいと思う。彼と同じように世の中を見、彼と同じように人生を生きようとしている者にとって、彼のひとことひとことが生きたことばである。ある者は彼のことばに慰めを見出

し、ある者は喜びを感じ、ある者は人生の指針を与えられるかもしれない。(それはサローヤンの意図するところではないかもしれない)

私もそのような人間の一人であり、サローヤンが好きな人間の一人なので、サローヤンの作品の中に自分の問題をいくつも見つけることができる。中でも、生命ある者に深い愛情と関心をもっている彼が、生命の自然な姿である子供の世界、それから子供のような心をもった大人の純粹無垢な世界を描きながら、(いわゆる)大人の世界の歪みとか偽善を浮き彫りにしている点に強く惹かれる。

二

サローヤンは子供が好きである。偽りがなく、生きることに真剣で、子供の世界なりの悪とたたかっている子供たちに、心からの愛情と親しみをよせている。それは、彼自身が少年らしい、人生に対する真剣で新鮮な情熱をもっているからだと思う。「自分が四十四歳だということを知らないフレズノ生まれの子」⁽⁸⁾はサローヤン自身でもあるし、サローヤンの作品中いたるところに登場する、子供の心をもった大人の代名詞みたいなものである。彼が子供の世界を描く場合、大人の世界を諷刺すると同時に、このような子供心をもった大人たちと子供たちの結びつきを描くことも忘れてはいない。それで彼の諷刺の意味がもつときいてくるわけだ。

彼は子供を通して、親と子、家族、家庭を描く。家庭が置かれている町や村や国の様子を描く。又、親と子の問題から夫と妻、男と女、という人間にとって永久不変の問題に関心を示している。サローヤンの場合、その問題を見つめる眼が子供の眼であり、その問題について語るのが子供の口である。

このような形で表わされた作品の中の代表的なものが「我が名はアラム」と「人間喜劇」であると思う。両方とも主人公が少年であるということの他に、同じ登場人物の出る短篇の集まりという形も似ている。では、両方の主

人公アラム・ガローラニヤンとホーマー・マッコーリーをとりまく世界——それは子供の世界と大人の世界である——はどのような世界だろうか。

アラムは、祖父母や母や多くの伯父や叔父たち、それから従兄弟たちと、アルメニヤからアメリカのカリフォルニアへ移住して来たガローラニヤン一族の子供である。アラムがおそらく八つか九つの年の夏、一家の中で馬鹿呼ばわりされているジョーギ叔父について、西瓜の収穫のために一ヶ月間出稼ぎにやらされることになった。ジョーギ叔父は働くことを知らず、ひまさえあれば木蔭にすわってチターを弾き歌を歌っている。けれどもその声は大変美しく、彼には明らかに音楽家としての素質がありそうである。しかし生活のもとでを稼ぐことのできない男は、一家の邪魔者になることもあるのだ。この無能な叔父の身の廻りの世話をする役をアラムは仰せつかった。二人は出かけ、家を一軒借り、ジョーギ叔父さんは仕事をさがしに近所の農家の門口をたたく。やがて小躍りして帰って来たジョーギは、もう西瓜とり入れの季節は終ったそうだといってすぐさまチターを取り出し歌い出した。そして一ヶ月間、ジョーギは毎日チターを弾きながら歌を歌い、アラムは二人のために御飯を炊いてすごし、一文無しで家に帰る。家では当然お祖父さんが一ヶ月間の労働の報酬を期待している。そこでお祖母さんが自分の、へそくりをそっとアラムに手渡す、と云う話である。

サローヤンの話にはよく(アメリカへ移住した)アルメニヤ人が出て来る。それは、彼自身がアルメニヤからの移民の息子として生まれたからであるが、アルメニヤという国には、昔の日本と同じように大家族制度が強く行われていたらしい。ガローラニヤン家でも祖父の権力は強く、家族のことを最終的に決めるのはお祖父さんであり、お祖父さんの命令には絶対に服従しなければいけない。このお祖父さんは、しかし、子供の心をもった大人である。一家の邪魔者扱いされているジョーギの付添いという役は迷惑な役であり、それは何か悪いことをした子供に罰として与えられることになる。そこで一家が集まって家族会議を開き、その子供を選ぶのだが、そのときゾラブ叔父

がアラムを指名する。アラムはよくゾラブ叔父さんの口まねをして歩き廻るので、ゾラブはどうもそれを根にもっていたらしい。お祖父さんはアラムにその役を命じ、会議は終り、みんなは帰ってゆく。そのとき彼はアラムにちよつと待てと云つて二人きりになったところで、

「ゾラブ叔父の口まねをしてみろ」

と云う。アラムがするとお祖父さんは大声で笑うのである。

ここでは、大人のお祖父さんと子供のアラムの心がしっかりと結ばれている。そのような安定した世界では、子供は素直にいたずらもできるし、素直にこれをあやまることもできる。

これに似た話は「人間喜劇」にも出て来る。『あんずの樹』という短かい物語である。毎年あんずの実の熟する頃になると、近所の腕白小僧たちが飢鬼大将に連れられてあんずの実を盗りにゆく。この風習はここ十年間つづいていて、二年前まではホーマーが飢鬼大将であつた。(ことし十四歳のホーマーはもうその地位から身を引いた)そのあんずの太木はヘンダーソンという老人の家の裏庭に生えているのである。ことしは、ホーマーの弟で四つになるユリシーズも腕白小僧の仲間に入れてもらつた。子供たちは、門があいているのにわざと垣を乗り越えてヘンダーソンの屋敷に入る。そして忍び足で樹に近づいてゆく。飢鬼大将のオーギーは、みんなをそれぞれの位置につかせ、自分は太枝にとびつく準備をする。この一部始終を、ヘンダーソン老人はわくわくしながらカーテンのすきまから見守っている。ことしはまだ三月だというのにもう小僧どもがやって来た。まだあんずは熟れてはおらんよ。おまえたのためにこのわしがあの実を熟れさせてやれたらな。などとひとりごとを云いながら、じつと自分の出番を待っている。そしてオーギーが枝にとびつくやいなや戸口にのっそりとその姿を現わすのである。子供たちはくもの子を散らすように逃げてゆく。が、はじめてのユリシーズはわけがわからず、ぽかんと立ちつくしている。樹からとびおりて一足おくらせて逃げかけたオーギーは、もどつて来てユリシーズを抱きかかえて逃げてゆく。その

一部始終を、ヘンダーソンはやはり何も云わないで見てゐる。

ここでも、子供たちとヘンダーソン老人との心の触れ合いが、読む者の心をほのぼのとさせる。ユリシイズが逃げようとしなないのは、ヘンダーソンさんはこわい人だという気持ちが全くしないからだし（それとともに、ヘンダーソンさんのあんずの実を盗ることが悪いことだ、と云うことも知らないのだが）、他の少年たちが逃げるのは、毎年ヘンダーソンさんが戸口に現われたらみんな逃げることになっているからだ。少年たちは実はヘンダーソンの出現をはじめから期待しているのである。彼が戸口にのっそりと現われるということも、彼らのいたずらの重要な一部分なのである。

ヘンダーソン老人もガローラニヤン家のお祖父さんも、子供のような心をもった大人なので子供と心が通じ合う。このような大人のいないところでは（あるいは、子供の心がわからない大人しかいないところでは）、アラムのいたずらもオーギーたちのいたずらも笑ってはすまされないかもしれない。

「我が名はアラム」の中に『サーカス』と云う話がある。アラムが小学校五年生のときの事件である。彼とクラスメートのジョーイとは、毎年サーカス小屋が町にかかるのを楽しみにしていた。サーカスが町にいるあいだ中、二人は学校から脱け出てサーカス小屋の人々の仕事を手伝ったり、ショーを見せてもらったりするのである。ことしもいよいよそんな頃になって、ある朝ジョーイが教室へとびんで来てきょうがその日だと云う。二人は先生のとめる声も聞かずに一目散に学校を脱け出す。しかし、校外補導員のスタフォードにつかまって学校へ連れもどされ、規則に従って校長先生からおしおきをされることになった。お尻を鞭で打たれるのだ。去年までは、二人が痛いの悲鳴を上げると、校長先生のドーソンはなるべく加減して悲鳴を上げてくれ、さもないと自分がどんなに残酷な仕打ちをしているかと廻りの人々に思われかねないから、と云うのだった。ところがことしのおしおきは全然痛くなかった。ドーソン先生は手加減して打ってくれたのだ。アラムもジョーイも嬉しくて、ドーソン先生にお礼を云

いたいのだが切り出せない。しかし「僕たちの気持を先生はわかっていた」とアラムは思う。「なぜならば先生は、わかっていたんだと僕たちに思わせるような、微笑を浮べたのだ。」

ここでも、少年たちとドーソンの心が（無言のうちに）通じ会うと云うことのために、裸のお尻を鞭で打たれるシーンが全然残酷ではなく、ただユーモラスな感じしか与えない。読む者は、ちょうどヘンダーソン老人が子供たちのいたずらをわくわくしながら窓から見守っていたように、ああ、アラムとジョーイは又何かやったな、と思つてほえむのである。

同情の眼が向けられるのはむしろドーソンのような気がする。彼自身には子供に罰を与えようという気持はない。彼はただ、「学校をさぼつた生徒には鞭のおしおきをする」と云う、市の教育委員会が決めた規則に従つたまでである。この規則を決めた大人たちは、子供の頃学校を脱け出して、サーカスのようなすばらしい見世物を見物することがどんなに楽しかったか、それは勲章をもらうよりもっと嬉しいことであつた、と云うことをさつぱり忘れてしまつたか、忘れようと努めている人々だ。しかしドーソンはこれを忘れてはいない。彼には子供の心がそのまま理解できる。彼のおかげで、少年たちは大人の世界の苛酷なおきてにあらさまに触れないですんだ。

三

「人間喜劇」の中の『大男のクリスマス』と云う話でも、子供の心をもつた大男のクリスマスが大人の世界と子供の世界とをつなぐ橋のような役割をしている。クリスマスは毛皮用動物を捕える猟師で、そのために必要な品物をあさりに町へやって来た。コヴィントン運動用具店の店先に置いてあつた動物用わなに眼をとめ、主人のコヴィントン氏から使い方を説明してもらっている。そこへ、四歳のユリシーズがやって来て、夢中になって一緒に説明に聞き入るうち、何かのはずみでそのわなにかかつてしまう。コヴィントンは、わなのはずし方を知らない。店の前には大勢の

野次馬が集まり、店を閉めざるを得なくなる。警官もやって来るがなすすべを知らない。ついにクリスが満身の力をこめて、わなをへし折り、ユリシーズを救い出す。彼はコヴィントンに要求されるまま、黙ってわなの代金二十ドルを置いて立ち去るのである。

ふさふさとした金髪のおごひげを生やした、雲つくような大男のクリスが、子供のような心持ち主であると云うことは、不可解なことでもあるし、よくありそうなことでもある。彼は腕力に訴えて、わなをこわそうとしながら、中にかかったユリシーズを怖がらせまいとしていろいろと話しかける。彼は三十年前（クリスは今五十四歳で独身である）、好きだった女に逃げられてしまったんだなどと真面目になつて四歳の子供に話したりする。一方では、わなにかかつてもし泣き声ひとつ上げないユリシーズに感心したり、騒ぎを聞いてかけつけたホームの弟思いの様子に心を打たれたりする。彼にとつて二十ドルは決して少額ではなかったと思う。しかし、それは一人の子供を救い出すことには比べものにならない。彼は使いものにならなくなったがらくたに対してそれを払ったのではない。

しかし、コヴィントン氏は正にそのがらくたを二十ドルで売ったのである。彼の頭には自分の商売、自分が一日にいくら儲けるかということしかない。だから、営業時間中に止むを得ず店を閉めなくてはならないことも、わなの発明者にわなのはずし方を聞きにゆくために店を留守にすることももつての他なのである。このような人間に限つて、「わたしはちゃんと税金も納めている善良な市民です」などと警官に向かって云う。ユリシーズが、無事ながら助け出されたとき、開口一番彼が云ったことは「さあさ、当店は又平常どおり営業を始めました」であつた。

ウォルター・コヴィントンは、しかし、明らかに非難の的として描かれているわけでもない。最後にホームが「こんながらくたを二十ドルで売るなんておじさんは大した心臓だよ」と云う他は、誰もコヴィントンを責めてゐるわけではない。作者は淡々と、こういう社会にはこういう人間も必要なのだと云っているかのようと思われる。自分の職業に励み、稼ぎに応じて税金を払っている人間を立派な人間とみなす社会はたしかに存在するのだから。

作者は、コヴィントンに愛情を感じないとしても、一抹のペーソスでこの問題进行处理しているように見える。

ウォルター・コヴィントンと対照的なタイプの人物が、アラムの叔父のメリクだと思ふ。メリクは、アラムのことを借りれば「てんでだめな」百姓である。夢想家で詩人で耽美主義者の彼は、ただ木や草花が育つてゆくのを眺めるために、つまり、純粹美学の立場から、六百八十エイカーの沙漠を果樹園に開墾することを想いつく。十一歳のアラムは、叔父さんの氣持がわかる、想像力豊かな詩人の素質をもったただ一人の身内である。二人は家族には内証で、このプランを実行に移す。まず、沙漠におい茂っているさばてんだとか灌木だとかを切り倒すのに数ヶ月、それから地面のあちこちに穴を掘つて地下水を湧き出させるのに数ヶ月かかる。最初の予定では、六種類の果樹を植えるはずだったが、結局二十エイカーの土地に柘榴を植えるだけにとどまった。柘榴の樹に花が咲くまでに四年かかる。そしてその年は三個の收穫があつた。六年目にはやつと二百個の柘榴がとれた。それは十一箱につめ分けられ、シカゴの青果卸商に送られる。メリクは一箱五ドルで売つてもらいたいと思ふ。けれども買手は一人もつかない。仕方なく全部送り返してもらうのだが、その交渉のためにシカゴにかけた長距離電話料は十七ドルであつた。送り返された柘榴の大半はアラムとメリク叔父で食べてしまふ。翌年、メリクはもう土地の支払いができなくなり、土地は（柘榴の樹と一緒に）地主に返されてしまふ。それから三年たつたある日、アラムとメリク叔父はその土地を見にゆく。そこは再び沙漠と化し、さばてんと灌木がおい茂り、柘榴の枯れ木があるだけだつた。二人は何も云わないが、云いたいことは山ほどあつて、それが何であるかお互にわかるのだった。

この話の中心は、アラムとメリク叔父さんの心の通じ合いよりも、メリクの人柄そのものであると思ふ。彼は全財産をつぎこんで広大な沙漠の土地を借り、七年もかけてやつと二百個の柘榴を收穫する。それを一箱（おそらく二十個近く入つてゐるのだらう）五ドルで売りに出すのだが、彼の目的は金儲けではない。一箱五ドルからびた一文もひかないぞ、と云う理由は、自分の創造した芸術品の価値を知る者の自信なのだ。高い電話料を払い、高い荷

造り代と送料を払い、そして今又送料受け取り人払いで品物を送り返してもらった。彼が残念に思うことは（もし残念に思うとすれば）、自分が費した金額ではなくて、自分の芸術品の価値が認められなかったことであろう。

（いわゆる）大人の世界では落伍者に属するメリクも、サローヤンの描く世界ではそうではない。彼はたしかに百姓としては「てんでだめ」かもしれない。しかし彼は愛すべき人間であるし、彼の中にはサローヤン自身もつている「もの、そのものの核心にじかにぶつかり、人間、自然、芸術の真髄と思われるものに到達しようとする執心」がある。

メリク叔父のような人間は、どうかすると「狂人」扱いを受けかねない。エール大学出の食料品屋ダーカスも又、その一人である。

まだ寒い四月のある日、アラムは二人の少年たちと川へ泳ぎにゆくが雨に会うし、おまけに川は泥水だった。三人ががたがた震えながらかけこむのがこのダーカスの経営する食料品屋である。ダーカスは三人の子供たちにはほとんど無料で食べものをくれたり、ぬれた服をストーブで乾かしてくれたりする。彼と子供たちは話をするが、彼の話し方は（機智にとんでいて）一風変っている。子供たちはこの人は気遠いかな、と思うが、多分そうじゃないだろうと思う。二十年たってからアラムは、彼が詩人で、金のためではなく詩人の気まぐれで、食料品屋をやっていたことがわかるのである。

「機関車三十八号」という名のオジブウェイ族インディアンも、やはりこのタイプである。彼は町の人々からは精神病院から逃げて来たと思われるが、アラムとはよい友だちになる。彼はろばにのって町へやって来たが、そのろばは電車にぶつかって死んでしまう。アラムは彼を自動車販売所へ案内し、インディアンは一九二二年型のバックカードを買う。彼はさらにアラムに釣の道具を買い与え、アラムにバックカードを運転させて川へゆき、彼が釣をするのを一日中眺めている。こんな毎日がつづいて夏は終った。十一月のある日アラムは、インディアンが迎えに来るのを一日中眺めている。こんな毎日がつづいて夏は終った。十一月のある日アラムは、インディアンが迎えに来るのを一日中眺めている。

た弟のインディアンをのせて、自分でバックカードを運転して町を去ったことを知る。彼はほんとうは自動車の運転ができたのだった。けれども、アラムがいつも自動車を運転して楽しめるように、自分は運転ができないとアラムに信じこませようとしていたのだった。

「機関車三十八号」という名のオジブウェイ族インディアンは、子供の心をもっていると同時に、大人らしい大人である。その点でメリク叔父やダーカスとは異って描かれている。彼は運転できることなどおくびにも出さない。そしておそらく釣も（そして狩猟も）うまいのだらうが、黙つてアラムにはアラム流の釣をさせておく。それでアラムも楽しいのだし、自分も楽しいのだからかまわないのである。苦勞を知る大人でなければ、仲々こんな態度はとれないと思う。

四

大人であることをひけらかさないでじつと子供を見守っている大人に、マッコーリー夫人がいる。

父親のいないマッコーリー家では、高校生のホーマーが、放課後電報配達をしながら家計を助けている。仕事が終わって家へ帰るのは、たいてい夜中の十二時すぎであるが、マッコーリー夫人は客間の椅子にすわって息子の帰りを待っている。ある夜彼女は、帰宅したホーマーが何事かで悩んでいるのに気づく。その日ホーマーは、息子が戦死したという電報を（これは第二次世界大戦中の物語である）あるメキシコ人の婦人に届けたのだ。電報を受け取った婦人は、深く傷つき悲嘆にくれて取り乱すのだった。ホーマーは、人間がこのように深く傷つくことがあるのだということを知り、生まれてはじめて知った。彼が電報局へもどると、電信技師のグローガンが酔いつぶれて眠っていた。グローガンはとくに停年を迎えた老人だが、恩給だけでは暮らしてゆけないのでまだ働きつづけているのだった。この二つの出来事は、十四歳の若い心にも生々しく大きなショックを与えた。彼は母親に一部始

終を話し、何だか世の中が變つてしまったみたいでひどく淋しい、と訴える。「あなたが淋しいのは、あなたがもう子供ではなくなったからなのよ」とマッコーリー夫人は云う。彼女は又、わたしは毎晩ここであなたが帰るのを待っているが、あなたが話したくないときはここへ来なくてもいい、と云う。彼女には、息子が話したいことがある、それがことばにならないときがある、ということがよくわかつているのだった。

それから何週間かたつて、この日メキシコの婦人に起こったと同じことが、ついにマッコーリー夫人にも起こる。出征していたホーマーの兄のマークスが戦死したのだ。ホーマーは、はからずもその知らせを自分の母親に届けることになる。彼はうつろな心で、しかし手だけは機械的にいつもの作業をしている——電報のカーボンコピーをファイルしてから、元の用紙をたたんで封筒に入れ、封筒を上着のポケットにしまう。そのとき、電報局の局長で、ホーマーが世界で一番すてきな人と思っているスバングラ青年がそばに来て、「散歩にゆこう」と云う。

二人は長いあいだ黙って歩いているが、やがて話し始める。しかしスバングラはすぐに、ことばで慰めることは不可能であることを悟る。彼はむしろ輕快に云う——

「君は蹄鉄投げがうまいかい？」

「いいえ」

「僕もだ。暗くなる前に一勝負やろうか？」

「ええ」

マッコーリー夫人やスバングラ青年と全く同じタイプの大人は、アラムの世界にはあまり姿を見せないようである。ホーマーが、十四歳の高校生で、実社会で働いている、半ば大人の世界に近づいている子供として描かれているのに対し、アラムは全くの子供として描かれている。アラムの世界は、平和な田園の世界であるが、ホーマーの世界は、戦時下の町である。しかしアラムも、大人の世界のみにくさから全く隔離されているわけにはゆかない。

アラムが十二歳のとき、ある雑誌の広告を見て、ボディビルの通信講座に申し込むが、それは一種の詐欺であったことがある。アラムは結局、その広告主がはじめに要求した金額の六分の一か七分の一の、三ドルを送っただけだったが、それでもその広告主は、ギーコ叔父さんの云うように「嘘つき」であり、「子供をだます奴」であり、「あまりいけ好かない奴」なのだ。アラムはそうは思わないし、その広告主をうらんでもいい。でもアラムがこれによって少しばかり大人の世界を知ったことはたしかだと思ふ。

アラムもホーマーも次第に成長し、いつかは大人の世界に足を踏み入れなければならない。彼らがどのような大人になるかということは、彼らがどのような子供だったかということや、子供のときにまわりの大人たちからどのように取り扱われたかということによると思ふ。アラムとホーマーに関するかぎり、立派な、あるいはよい大人になることを信じていてよいように思ふ。

サローヤンの描く世界に登場する人物は（大人も子供も）、ほとんどが善良で、純粹で、思いやりがあつて、想像力があつて、ユーモアがあるような人々である。しかし、世の中には決してそんな人ばかりがいるわけではないことは、コヴィントン氏やボディビルの講習の詐欺男の登場によつてもあきらかである。しかし、この二人の場合は、はじめから好ましくない人物として描かれているから問題はない。避けようと思えば避けられる（しかも誰も傷つけないで）社会悪だから。人間の心を傷つけ、苦しめ、悩ませ、人間の世界を住みにくくしているものはそんなに単純なものではないと思ふ。それは人間の力ではどうすることもできないものであり、ある場合には、人間の善意とか純粹な気持がその原因になっていることが多い。

たとえば戦争。ホーマーは、あのメキシコの婦人をあれほど悲しませ、そして自分の家庭から兄を奪ってしまったものが戦争だということはわかつていても、一体誰が悪いのか、誰を憎んだらいいのか、ということはわからない。

それから（両親の）離婚。『むなしい旅の世界とほんものの天国』（『むなしい旅の世界』より）では、両親が離婚して父親に引き取られ、町から町を旅して暮らしている九歳の男の子の気持が語られている。彼は、新しい町で友だちができた頃に、又次の町へ向かって旅立たなければならぬ。彼は泣きたいのをこらえて考えている——お父さんは、泣きわめく九歳の息子が一緒につきまといていなくてさえ、あり余るほどの苦勞をしょっているんだ、と。彼は淋しい。しかし、自分の淋しい生活を歌っているカウボーイの歌をラジオで聞いて、「そうだ、きつとどこへ行ったら淋しくない人間なんて一人もいないのだ」と自分に云い聞かせるのである。

五

「どこへ行ったら淋しくない人間なんて一人もいないのだ」というのがサローヤンの根本的な考え方のひとつであると思う。これは、九歳の少年の感想にしてはあまりにもいたいたしい感想かもしれない。しかしこれが世の中のほんとうの姿であり、サローヤンの子供たちは世の中のほんとうのことから不自然に眼をふさがれるようなことはされない。世の中のありのままの姿を見せられて、苦しいことや惨めなことがあっても、それに耐えてゆく方法を教えられる。たとえば、淋しくても、みんなが淋しいのだから、自分一人よくよしたりひがんだりしないで、この「淋しい」ということを何か別の感じ方で感じればよいのである。そのためにユーモアや抒情が必要になる。そこで、彼が人間の悲惨な生活を描いても、「まあすごい」という感想は出ないで「まあきれいだ」という感想が出るわけである。

彼はすべてを受け容れる。現実から逃げようとしぬ。彼にとって本質的に悪いものはない。「苦しみや死」でさえも恐れぬ⁽¹⁰⁾。彼は、人が死を避けることはできないということを信じれば、生も避けることはできないということを信じるはずだと云っている⁽¹¹⁾。それで彼は、深く息を吸い、ものを食べるときには心からその味を味わい、眠

るときにはほんとうに眠って、生をエンジョイする。彼は、悩んだり、愛したり、憎んだり、自慢したり、笑ったりしながら、人間らしく生きる。彼は、瞬間瞬間を一生けんめいにごまかさずに生きるのである。それが彼の文章に暖い血をかよわせ、息づきを感じさせる。

サローヤンには又「心の確かさ」がある。それは「自由人の持つ、生き生きとした、創造的な、尊敬すべき、大胆な、脅迫をも恐れぬ、傲慢な、心の確かさである。」⁽¹²⁾この心の確かさが、彼の作品の中に「作者の精神のリズム」となっており、表われているのだと思う。このリズムがあるかないかによって、その作品に芸術的価値があるかないかが決まるのである。芸術的価値、あるいは文学的価値が文学作品に最も大切なものであると思う。仮に、サローヤンの文学作品に、問題意識を起こさせる力や、思想の展開や、現実の知的な濃縮や、物語としてのまとまりが欠けているとしても、彼の作品には、他の多くの作家が見落している何かを描かれていると思う。それは何だろうか？「自然な生命」と云ってもよいし「子供の世界」と云ってもよいと思う。作家にとって一番大切なことは、この「描く」ことではないのだろうか。サローヤンは「描く」作家である。それは彼に「心の確かさ」があり「精神のリズム」があるからできるのだと思う。「心の確かさ」や「精神のリズム」は又、一度大人になってしまった人間が、未だに子供のように感じたり、見たり、聞いたりするためには、絶対に必要なもののような気がする。

註

- (1) 斎藤教衛・吉田三雄共訳「笑うサム・心高原にある者」二〇三—二〇四ページ。
- (2) 清野暢一郎訳「どこかで笑ってる」二六二ページ。
- (3) 斎藤 一九七ページ。
- (4) 元田脩「『サローヤン——挑戦と挫折——』一四八ページ。
- (5) 古沢安二郎訳「サローヤン短篇集」二〇—二二ページ。

- (9) Foley, Martha & Burnett, David, eds., *The Best American Short Stories*, p. xi.
- (7) 斎藤 一九二一年。
- (8) Foley & Burnett, *op. cit.*, p. 312.
- (9) 古沢「サロヤン短篇集」二二頁。
- (10) Floan, Howard R., *William Saroyan*, p. 120.
- (11) Saroyan, W., *The Daring Young Man on the Flying Trapeze*, p. 12.
- (12) 古沢「サロヤン短篇集」二四頁。
- (13) 清野「どこかで笑つてゐる」二六二頁。精神のリズムが芸術作品の価値を決めるといふ清野氏の説は、志賀直哉氏によつても裏づけられている(昭和六年「読売新聞」)。

参考文献

邦文

- 古沢安二郎訳「わたし、ママが大好き」(*Mama I Love You* by W. Saroyan) 東京 新潮社 一九五七年。
- 古沢安二郎訳「サロヤン短篇集」(新潮文庫) (*The Whole Yoyald* by W. Saroyan) 東京 新潮社 一九六四年。
- 加藤道夫訳『夕空晴れて』(“Coming Through the Rye” by W. Saroyan) 「現代世界戯曲選集6」(菅原卓編) 東京 白水社 一九五四年。
- 三浦朱門訳「我が名はアラム」(角川文庫) (*My Name Is Aram* by W. Saroyan) 東京 角川書店 一九六六年。
- 元田脩一『サロヤン——挑戦と挫折——』「季刊英文学」四巻三号一二九—一五二頁 京都 あぼろん社 一九六七年。
- 斎藤教衛・吉田三雄共訳「笑うサム・心高原にある者」(*Selected Short Stories* by W. Saroyan) 東京 英宝社 一九五八年。
- 清野暢一郎訳「どこかで笑つてゐる」(*The Laughing Matter* by W. Saroyan) 東京 ダウイッド社 一九五五年。
- 末永国明訳「サロヤン傑作集」(*The Saroyan Special* by W. Saroyan) 東京 新鋭社 一九五六年。
- 菅原卓訳『飢えたる者ども』(“The Hungers” by W. Saroyan) 「現代世界戯曲選集7」(菅原編) 東京 白水社 一九五四年。

- Floan, Howard R., *William Saroyan*, Twaine's, United States Author Series, New Haven, College & University Press, 1966.
- Foley, Martha, ed., *The Best of the Best American Short Stories* 1915—1950, Boston, Houghton Mifflin, 1952.
- Foley, M. & Burnett, David, eds., *The Best American Short Stories*, London, MacGibbon & Ree, 1964.
- Saroyan, William, *My Name Is Aram*, New York, Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Saroyan, W., *The Daring Young Man on the Flying Trapeze and Other Stories*, New York, Random House, 1934.
- Saroyan, W., *The Human Comedy*, New York, Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Saroyan, W., "Resurrection of a Life" (1936) in Foley, ed., *The Best of the Best American Short Stories*, pp. 245—253.
- Saroyan, W., "What a World, Said the Bicycle Rider" (1962) in Foley & Burnett, eds., *The Best American Short Stories*, pp. 301—312.

